時計も、まだ六時前です。電車は、黒い割引の札をぶらさげて、さわやかなベルの音をひびかせながら走っていました。店の前を通る人たちも、まだたいていは、しるしばんてんや、青い職工服をきて、べんとう箱のつつみをぶらさげた人たちです。そういう人たちの中には、いつとはなしに要吉と顔なじみになっている人もありました。

「よ、おはよう。せいがでるね。」

若い人は、いせいよく声をかけながら、新しい麻裏(あさうら)ぞうりで要吉のまいた水の上を、ひょいひょいと拾い歩きにとんで行きました。なっとう屋のおばあさんが見えなくなったと思うと、このごろでは、金ボタンの制服をきた少年が、「なッとなッとう」となれない呼び声をたてて歩いていました。

そんな朝の町すじをながめながら、店さきをはいている時は、要吉にとっては一日中でいちばん楽しい時なのでした。なぜかというと、それから朝の食事がすむと、要吉にとってはなによりもいやな、よりわけをしなければならなかったからです。店の品ものの中から、いたみかけたのやくさりがひどくって、とても売りものにならないようなのを、よりわけて、それぞれ箱とかごとへべつべつにいれるのです。

枝からもぎとられると、はるばると、汽車や汽船でゆられてきたくだものは、毎日毎日、つぎからつぎへといたみくさって行くのでした。要吉は、なめらかなりんごのはだに、あざのようにできた、ぶよぶよのきずにひょいとさわったり、美しい金色のネイブルに青かびがべっとりとついたりしたのを見るたんび、まるで自分のはだが、くさって行くようないたみを感ぜずにはいられませんでした。

よりわけがすむと、今度は、一山売りのもりわけです。いたみはじめたくだものの箱の中から一山十銭だの二十銭だのというぐあいに、西洋皿へもりわけるのです。そのあんばいが、それはむずかしいのでした。

「そのくらいなのは、まだだいじょうぶだよ。」

少し、きずが大きすぎるからと思って、はねのけると、要吉は、すぐ主人にしかられました。それではこのくらいならいいだろう、ひとつおまけにいれといてやれと、お皿にのせると、

「そりゃア、あんまりひどいよ。よせよせ。」

と頭ごなしにどなりつけられます。

「おまけなんです。」

要吉がいいますと、主人は、

「ばか、よけいなことをするない、数はちゃんときまってるんだぞ。」と、けわしい目をしてにらみつけます。

要吉は、まったく、どうしていいのかわからなくなってしまいました。ですから仕事がちっとも